

日本初の五輪選手でマラソン競技に出場した金栗四三（1891〜1983）の生涯を描く本紙連載漫画「KANAKURI（カナクリ）」（毎週土曜朝刊掲載）の制作関係者が12日、和水町に残る四三の生家や足袋などゆかりの資料を展示する玉名市立歴史博物館などを訪れ、在りし日の四三の姿を思い浮かべながら取材を進めた。

関係者は、構成を担当する熊本マンガミュージアムプロジェクトの橋本博代表、同副代表の鈴木寛之・熊本大准教授、作画の岩田絃典・崇城大非常勤講師の3人。四三が暮らした地域や遺品に触れ、連載漫画に生かそうと訪れた。

本紙漫画「KANAKURI」制作関係者

和水町

生家取材「四三」を思う

四三の生家を訪問した一行は、和水町職員の案内で広い土間や小屋が連なる築1000年を超える旧家を見学。「造り酒屋を営む金栗家は裕福で、四三は専用の部屋をもらって勉強にも励んでいた」などと説明を受けた。博物館では学芸員から四三の人柄について聞き、「親しみやすく、子どもたちのために五輪のユニフォームを着て走って見せるような人だった」と紹介された。

四三のすり減った靴や足袋も目にした岩田さんは「実際に金栗さんが使っていた道具を見て、元気があった姿をありありと想像できた」と創作へ意欲を燃やしていた。

（松本敦）



和水町に残る金栗四三の生家を、町職員（写真左）の案内で見学する漫画「KANAKURI」の制作スタッフ。写真右から岩田絃典さん、鈴木寛之さん、橋本博さん＝12日